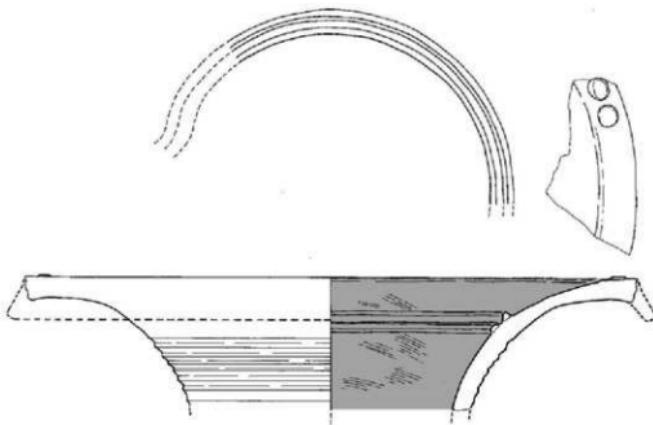


空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 5

席田大谷遺跡群 6

—第7次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第907集



2006

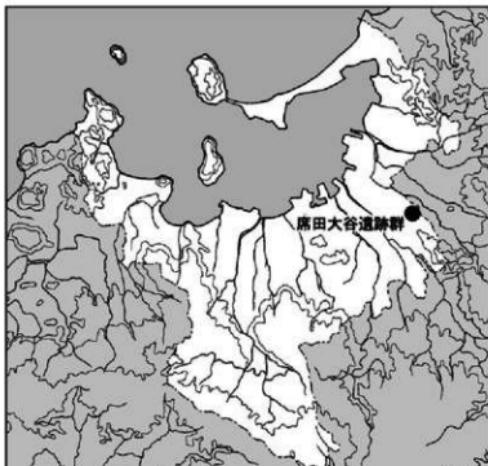
福岡市教育委員会

空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 5

むしろ だ おおたに
席田大谷遺跡群 6

—第7次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第907集



遺跡略号 OTN-7

遺跡調査番号 0452

2006

福岡市教育委員会

序

福岡市では文化財保護法の趣旨に基づき、文化財の適切な保存と有効な活用をめざしています。埋蔵文化財においては、公共・民間の各種開発事業に対する事前審査を行い、これが損なわれる場合には記録保存のための緊急調査を実施しています。

本書は都市計画道路福岡空港線改良工事に伴い実施した調査について報告するものです。月隈丘陵のふもとを走る道路はこれまで渋滞が著しく、かねてよりこの緩和が求められていましたが、沿線はまた重要な遺跡が集まる市内でも有数の文化財の宝庫でもあります。

調査では弥生時代の集落跡を中心とする遺構を確認し、瀬戸内地方との交流を示す土器が出土するなど、大きな成果をあげることができました。

調査に際し、本市土木局道路建設部東部建設課をはじめとする関係者、ならびに地元住民の皆様方にご理解とご協力を頂き、調査を円滑に進めることができました。心よりお礼申し上げます。この報告書が幅広く活用され、文化財保護の理解を深める一助となれば幸いと考えます。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木とみ子

例　　言

1. 本書は平成16（2004）年10月5日から同年11月19日に福岡市教育委員会が行った、博多区東平尾3丁目1番地内所在の席田大谷遺跡群第7次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は、福岡市土木局が計画した都市計画道路福岡空港線改良工事に伴う令連事業として行った。
3. 検出遺構には発見順に3桁の連番号を与え、遺構の性格を示す記号としてSA（杭列）、SB（掘立柱建物）、SC（堅穴住居）、SE（井戸）、SK（土坑）を頭に付した。柱穴には別途に101から番号を付し、頭に記号SPを付した。
4. 本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武　学、坂口剛毅が行った。
5. 本書に使用した遺物実測図の作製は、吉武、田中克子が行った。
6. 本書に使用した写真的撮影は、吉武が行った。
7. 本書に使用した図の製図は、吉武、田中が行った。
8. 土器に付着した黒色顔料の分析は福岡市埋蔵文化財センターが行った。
9. 本書に使用した方位は全て磁北である。
10. 本書の執筆と編集は、吉武が行った。
11. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収藏し、ここで管理・活用する。

遺跡調査番号	0452		遺跡略号	OTN-7	
調査地地籍	博多区東平尾3丁目1番地内		分布地図番号	22 上臼井 0024	
開発面積	600m ²	調査対象面積	600m ²	調査面積	363m ²
調査期間	2004年（平成16年）10月5日～2004年（平成16年）11月19日				

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 席田大谷遺跡群第7次調査地点の位置と周辺の遺跡	2
第二章 発掘調査の記録	7
1. 発掘調査の方法と経過	7
2. 基本層序	7
3. 検出遺構と出土遺物の概要	7
4. 検出遺構と出土遺物	10
(1) 杭列	10
(2) 堀立柱建物	10
(3) 積穴住居	15
(4) 井戸	18
(5) 土坑	27
第三章 おわりに	28

挿図目次

Fig. 1 席田大谷遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2 周辺地形と近隣調査地点の位置 (1/5,000)	4
Fig. 3 周辺の旧地形 (1/5,000)	5
Fig. 4 席田大谷遺跡群第7次調査区の位置 (1/500)	6
Fig. 5 I区の遺構配置 (1/100) と土層略測 (1/40)	8
Fig. 6 II区の遺構配置 (1/100) と土層略測 (1/40)	9
Fig. 7 SA-020・021 (1/80)	11
Fig. 8 SB-030 (1/60)	12
Fig. 9 SB-044・045 (1/60)	13
Fig. 10 SB-030・044・045出土遺物 (1/3)	14
Fig. 11 SC-046 (1/60)	15
Fig. 12 SC-046出土遺物 (1/3)	16
Fig. 13 SC-047 (1/60)	17
Fig. 14 SC-047出土遺物 (1/3)	17
Fig. 15 SE-040 (1/40)	19
Fig. 16 SE-040出土遺物 I (1/3)	21
Fig. 17 SE-040出土遺物 II (1/3)	22

Fig.18	SE-040出土遺物Ⅲ (48は1/4、他は1/3)	23
Fig.19	SE-040出土遺物IV (1/3)	24
Fig.20	SE-040出土遺物V (1/3)	25
Fig.21	SK-031・032・042 (1/40)	27
Fig.22	SK-031・032・042出土遺物 (83は1/2、他は1/3)	27

図版目次

扉 I 区から福岡空港を望む（南から）

PL. 1	1. I区の表土剥ぎ（北から）	2. 調査範囲の全景（南から）
PL. 2	1. I区全景（南から）	2. II区全景（南から）
PL. 3	1. SB-030（南から）	2. SB-030（北西から）
PL. 4	1. SC-046（南から）	2. SC-047（南から）
PL. 5	1. SE-040上層遺物出土状況（北西から）	2. SE-040土層断面（南東から）
PL. 6	1. SE-040完掘後（南東から）	2. SK-032（東から）
PL. 7	1. SK-042（東から）	2. II区調査風景（北から）
PL. 8	出土遺物（縮尺不同）	

表目次

Tab. 1	空港線関係埋蔵文化財発掘調査一覧	2
Tab. 2	席田大谷遺跡群発掘調査一覧	3

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

都市計画道路福岡空港線拡幅工事に伴う埋蔵文化財の調査に至る経過については既刊の報告書に詳しいが、平成12（2000）年2月7日に福岡市土木局道路建設部東部建設第2課（現東部建設課）によって建設予定地内の埋蔵文化財の有無についての事前審査申請があり、これを受けた教育委員会文化財部埋蔵文化財課では、事業地内のうち埋蔵文化財包蔵地の可能性がある箇所についての回答を行うとともに、数回にわけて調査可能な申請地に対して試掘調査を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接する2地点で遺跡の存在を確認した。ひとつは北側の席田青木遺跡周辺部分、いまひとつは南側の久保園遺跡・席田大谷遺跡群周辺部分である。これらに対する道路計画変更等による保存は困難な状況にあることから、東部建設第2課の依頼により埋蔵文化財課が記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなり、用地買収や構造物等の撤去が終了し調査可能となった部分から順次調査を行った。調査は平成12年度より開始し、平成16年度までにこの事業に関してTab.1のとおり6地点で調査を行い、既に福岡空港線は全線開通した。また、5地点までが既に調査報告書を刊行しており、平成17年度に本書の刊行を以て一連の事業が終了する。

本書で報告する席田大谷遺跡群第7次調査は、発掘調査を平成16年（2004）10月5日から同年11月19日に、同じく整理報告書作成を平成17年度に、いずれも土木局の令達事業として行った。

2. 調査の組織

調査にあたり、福岡市土木局道路建設部東部建設課、並びに地元住民の皆様にご理解とご協力を頂いた。また、株式会社アシックスには水道水を提供頂いた。記して感謝申し上げたい。また、井戸から出土した瀬戸内系弥生土器について、福岡市埋蔵文化財センターの常松幹雄氏にご教示頂いた。

調査は以下の組織で行った。

調査委託	福岡市土木局道路建設部東部建設課
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子
調査総括	埋蔵文化財課長 山口譲治 埋蔵文化財課調査第2係長 池崎譲二
調査庶務	文化財整備課管理係 御手洗 清（前任）、鈴木由喜（現任）
調査担当	埋蔵文化財課事前審査係 井上蘭子（事前協議担当） 埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学（調査担当）
調査協力	坂口剛毅（技能員）、池田省三、上野龍夫、加藤常信、唐島栄子、坂下達男、佐藤俊治、嶋 ヒサ子、大長正弘、高野瑛子、中村尚美、永松トミ子、西田文子、布江孝子、野田淳一、平川正夫、松永シゲ子、三浦 力、宮崎タマ子、持丸玲子、森田祐子、山内 恵、山崎光一、山下智子、結城チヂ子、吉住政光、吉田恭子（五十音順、敬省略）
整理協力	田中克子（技能員）、四反田美香子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵 (五十音順、敬省略)

3. 席田大谷遺跡群第7次調査地点の位置と周辺の遺跡 Fig. 1~4

席田大谷遺跡群は、福岡空港を眼下に望む月隈丘陵に位置する。月隈丘陵は四王寺山から続き、次第に高度を下げながら北西方面に伸び、東西を流れる宇美川と御笠川により開析を受けて多数の枝丘陵に分かれ、あるものは独立丘陵に、あるものは鞍部で連なる起伏のある丘陵になっている。この枝丘陵の末端付近は更に細かい谷が入り込んで凹凸をなす複雑な地形をなしており、これらの尾根上に甕棺墓や古墳が点在し、斜面の西側～南側に集落が多く展開するが、北面する斜面には遺跡が少ないことが過去の調査によって明らかとなっている。第7次調査地点はこのような丘陵が更に西へ高度を下げる冲積地へと埋没していく末端あたりに位置しており、西側にはかつて「席田」の由来となった水田が蓮状に並ぶ冲積地が広がっていたが、現在は福岡空港滑走路となり往時の姿を留めていない。

このあたり一帯は戦前には平尾炭坑が置かれ、丘陵上の雜木林には今も縦坑が一部残るが、昭和19年に旧陸軍が板付飛行場（現福岡空港）を強制収容した頃から弾薬庫に利用され、戦後は米軍の弾薬庫建設に伴う掘削を受け、特に丘陵尾根線の東側では旧地形を留めず、遺跡の存在もあまり知られていない。また、埋蔵文化財の調査が頻繁に行われるようになる以前には、宅地造成や土取りにより甕棺墓等の数多くの遺跡が破壊されたと伝える。

Tab. 1 空港線関係埋蔵文化財発掘調査一覧

地点	遺跡名	調査番号	調査期間	所在地	調査面積(m ²)	報告書
1	久保園遺跡第2次	0017	2000.05.05～07.03	博多区東平尾2丁目2番地内	152.4	市報712集
2	席田青木遺跡第4次	0026	2000.07.06～08.17	博多区青木1丁目4番地内	548	市報712集
3	席田青木遺跡第5次	0107	2001.05.17～08.17	博多区青木1丁目1番地内	706	市報777集
4	席田大谷遺跡群第6次	0216	2002.05.08～07.13	博多区東平尾2丁目4番地内	355	市報828集
5	久保園遺跡第3次	0350	2003.09.25～11.21	博多区東平尾2丁目4番地内	373	市報837集
6	席田大谷遺跡群第7次	0452	2004.10.05～11.19	博多区東平尾3丁目1番地内	363	本著

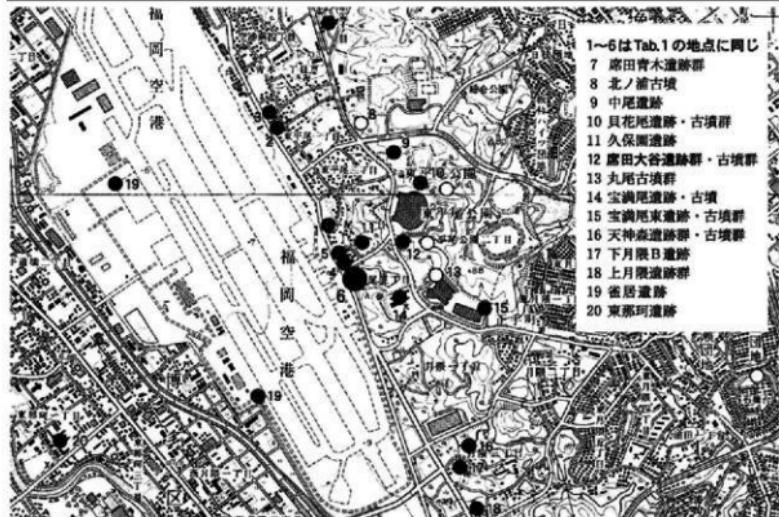


Fig. 1 席田大谷遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

周辺でこれまでに発掘調査を実施した遺跡については既刊の福岡市埋蔵文化財調査報告書に詳しいので、今回の調査で確認した遺構・遺物と関連が深い弥生時代中期から古墳時代前期を中心概観するに留める。周辺遺跡はその立地から、月隈丘陵の尾根～裾部に展開する一群と、丘陵と御笠川の間の沖積地に位置する一群に分けられる。月隈丘陵では、史跡・金霞遺跡に代表される甕棺墓を主体とする埋葬遺構が弥生時代前期後半頃から顯著となり、儀器化した中細形銅劍とガラス製管玉を副葬した上月限遺跡第3次調査の甕棺墓は中期後半における集団首長墓と考えられている。当地域ではこれらの甕棺墓に先行または併行して土壙墓が伝統的に造営されていたとみられ、後には甕棺墓も一部残るが、宝満尾遺跡では後期前半頃の土壙墓に舶載鏡や鉄製品・ガラス製小玉が副葬されている。丘陵部ではこれを最後に5～6世紀に古墳が築造されるまでの間、墓の造営が衰退するようである。これらに対応する集落遺構は、弥生時代中期に中尾遺跡や久保園遺跡第1次調査で斜面を段状に造成して竪穴住居を構えるほか、近年実施した席田大谷遺跡群第6次調査や久保園遺跡第3次調査で中期後半の竪穴住居等からなる集落を確認しており、沖積地に接する丘陵末端に集落が濃密に展開している可能性を示した。また、久保園遺跡第1次調査では、棟持柱を有する梁行5間・桁行8間の大型掘立柱建物を確認し、東隣りの土器窯から弥生時代中期後半～後期前半の祭祀性の強い土器が多数出土した。この建物は、平野部を一望する緩斜面の好適地に竪穴住居を押しのけるようにして建てられており、土器窯はこれに対する祭祀行為の残滓と考えられる。弥生時代後期には、席田大谷遺跡群第1～4次調査で丘陵中腹に検出した竪穴住居等や、今回の掘立柱建物・井戸等で構成される集落が營まれており、後期後半には久保園遺跡や席田青木遺跡等にも集落が認められる。他方、沖積地での遺跡の周期的な動向は丘陵部のそれにはほぼ符合しており、雀居遺跡では沖積高地を利用した集落や墓地が弥生時代前期に始まり、中期にも継続している。御笠川を少し下った東比恵三丁目遺跡では中期の水田跡も発見された。後期後半には雀居遺跡で環濠に囲まれた掘立柱建物群からなる集落が出現し、環濠脇には大型の掘立柱建物が配置されるなど拠点的な様相を呈する。下月限C遺跡も同様の沖積高地に立地しており、弥生時代後期後半から古墳時代前期に掘立柱建物と竪穴住居からなる集落が營まれることが明らかとなった。

席田大谷遺跡群は1972年に米軍より返還後、現在東平尾運動公園となっている各運動施設の建設に伴って埋蔵文化財の調査が始まった。以後、第5次までがこの整備等に伴う調査で、丘陵尾根～中腹斜面を対象とし、第6・7次は道路拡幅工事に伴って丘陵末端の緩斜面を調査した。当初は丘陵尾根～中腹までの狭い範囲を大谷遺跡と呼んだが、文化財分布地図の改訂により現在は西側の赤穂ノ浦遺跡も含めた広い範囲を席田大谷遺跡群と称している。赤穂ノ浦遺跡も運動施設建設に伴う調査であるが、横帯文銅鐸鋳型の発見により現状保存された。当遺跡と北側の久保園遺跡との間には浅い谷が入るが一連の遺跡とみられ、南側の宝満尾遺跡との間は地名の由来となった大きな谷で隔てられる。

Tab. 2 席田大谷遺跡群発掘調査一覧

次数	調査番号	調査原因	調査面積	主な検出遺構/出土遺物	報告書
1	7613	運動公園建設	1,600	竪穴住居（弥生後期）・青銅製鍬先・鍔斧	市報46集
2	8402	運動公園整備	2,600	竪穴住居（弥生中～後期）/中国鏡、玉類、鉄製品	市報218集
3	8519				
4	9210	球技場建設	1,437	竪穴（弥生中期）、甕棺墓（中期末～後期初）、掘立柱建物（物見台？）・溝・石蓋土壘壁（後期）、円埴（5～6c）/石製圓戈鋒型模造品、鍊鏹、袋狀鍔斧、刀子、鐸形土製品	市報357集
5	9421	運動公園整備	100	甕棺墓（弥生中期）、古墳（6c）/耳環、玉類、鉄鏡・鍔・刀子・短刀・鐵	市報537集
6	0216	空港線道路改良	355	竪穴住居・掘立柱建物（弥生中期）、井戸（後期末）、谷（弥生中期～古墳初頭）	市報828集
7	0452	空港線道路改良	363	竪穴住居？・掘立柱建物・井戸（弥生後期）/瀬戸内系弥生土器	本書

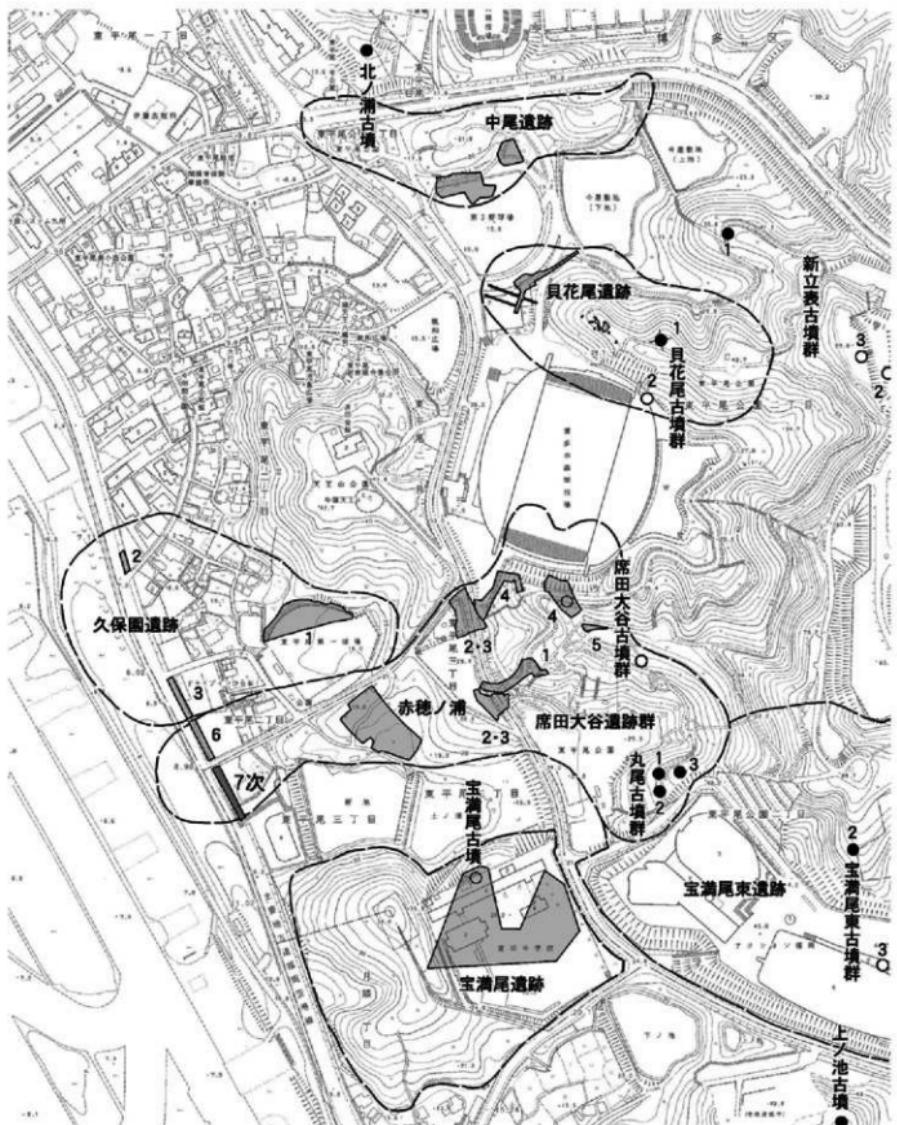


Fig.2 周辺地形と近隣調査地点の位置 (1/5,000)

数字は調査次数及び古墳号数



Fig.3 周辺の旧地形 (1/5,000)

遺跡名等はFig.2に同じ、地図は大正末～昭和初期

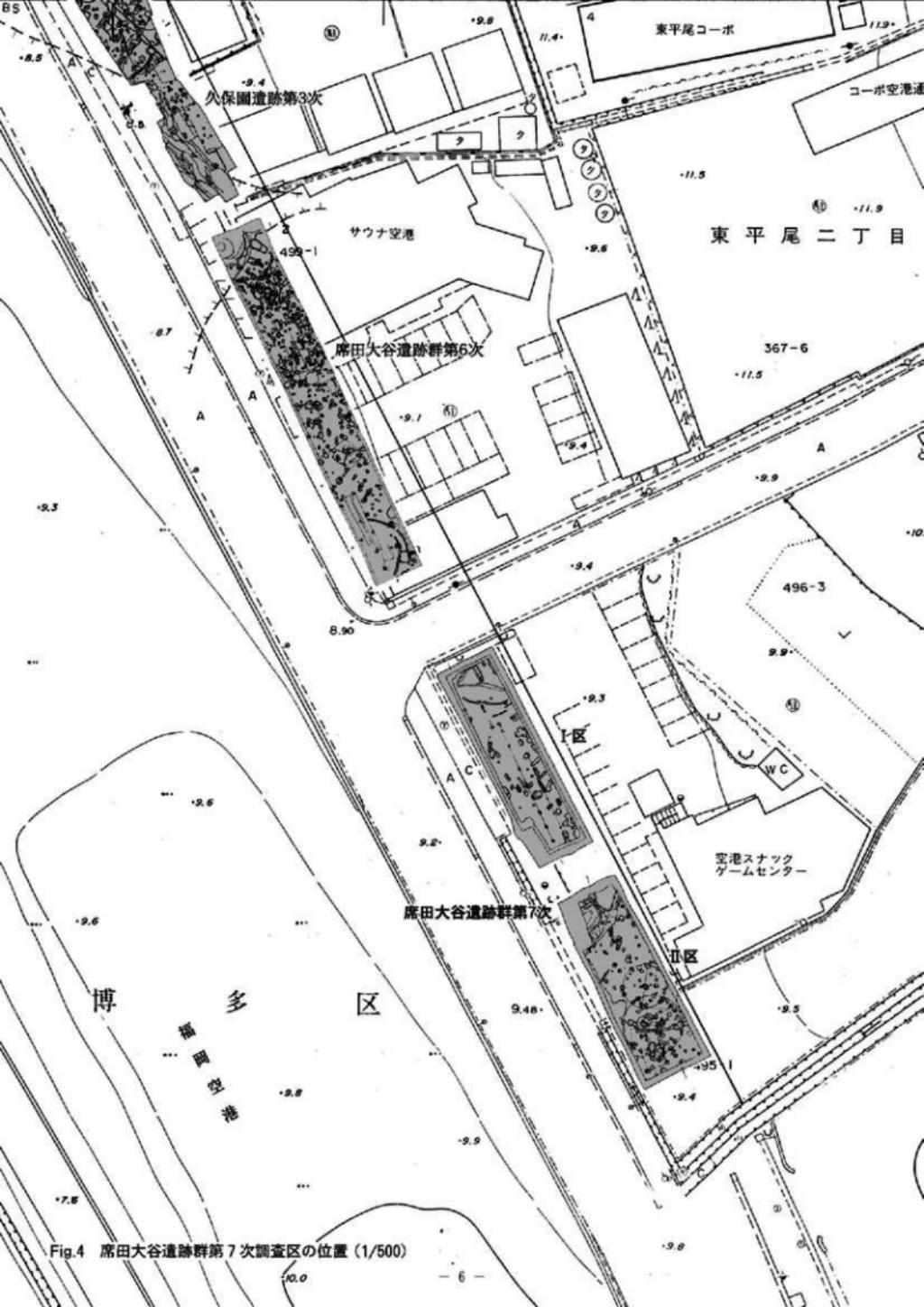


Fig.4 席田大谷遺跡群第7次調査区の位置 (1/500)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

調査地点は月隈丘陵から西へ派生する支丘西～南側の緩斜面に立地する。東側には赤穂ノ浦遺跡が近接し、道路を挟んで北側に第6次調査地点が隣接する。対象地は現道路の東に接する東西9.1～10.3m、南北60.6～63.4mの細長い区画で、面積は約600m²である。調査前は主に店舗駐車場として使用されていたため事前に試掘調査を行うことができなかつたが、北側の第6次調査では南端部で削平が著しいものの遺構が認められたこと、対象地南端のわずかな空閑地に対して行った試掘調査により遺構が確認されたこと等により、工事対象範囲全体を要調査とした。

調査に際しては、東側に隣接する店舗駐車場への出入口を確保する必要があり、南北に調査区を二分した。調査は構造物撤去工事の立会から開始し、まず北側I区の調査を行い、終了後にI区を埋めて仮設進入路を建設するために調査を約半月間中断し、工事完了後に南側のII区の調査を行った。ただし、I～II区間に埋設管が横断して調査不可能な部分があり対象から除外したため、I～II区は連続しない。表土は重機を用いて除去し、残土の大半は搬出した。以上のようにして設定した調査区は、I区は東西約7m×南北約25mの176m²、II区は東西7～8m×南北約23.5mの187m²で、合計の調査面積は363m²となった。

遺構実測は調査区の形状に合わせて任意に設置した基準線をもとに行い、1/100平板測量、1/20平面実測の他、適宜土層図や個別遺構図等を作製した。その後、土木局より提供を受けた座標データを用いて国土座標（第II系）上の遺構の位置を求めた。標高もこれによる。

2. 基本層序 Fig.5・6

標高は地表面が海拔9m強、遺構面が同8m弱で、基盤土は花崗岩風化土が再堆積した沖積層で、水平に削平されている。北側I区は地表下1.5mで基盤土となり、直上に水田床土・耕作土が2層被る。I区では中世以前の遺構が完全に消滅しており、近世の水田造営時に激しく削平を受けたものと考えられる。南側II区は地表下1.2～1.1mで基盤土となり、直上に水田床土・耕作土が1層乗る。地形は南へ向かって落ちるものと考えられるが、遺構面は逆にI区よりも南のII区が20cm強高い。また、II区の南側には谷部が存在するはずだが、今回の調査区内ではその落ち際を確認することはできなかった。

3. 検出遺構と出土遺物の概要 Fig.5・6、PL.1・2

北側I区は近世以降の開田によるとみられる削平が著しく、中世以前にさかのぼる遺構は全く認められなかった。杭列やピット等が見られるが、肥前系染付などが少量出土しており、いずれも近世以降の水田造営に関わるものと考えられる。他は近代以降の擾乱坑のみである。

南側II区ではほぼ全域に遺構が認められた。調査時に検出した遺構は、弥生時代中・後期のピット多数、弥生時代後期の井戸1基・掘立柱建物1棟・土坑3基である。ピットの多くは直列せず、弧状の配置を取るもののが認められたので、ピット出土遺物の時期からみて円形竪穴住居の柱穴と考えて住居2棟を復元した。また、調査後に図上で掘立柱建物2棟を復元し、建物は都合3棟となった。これ

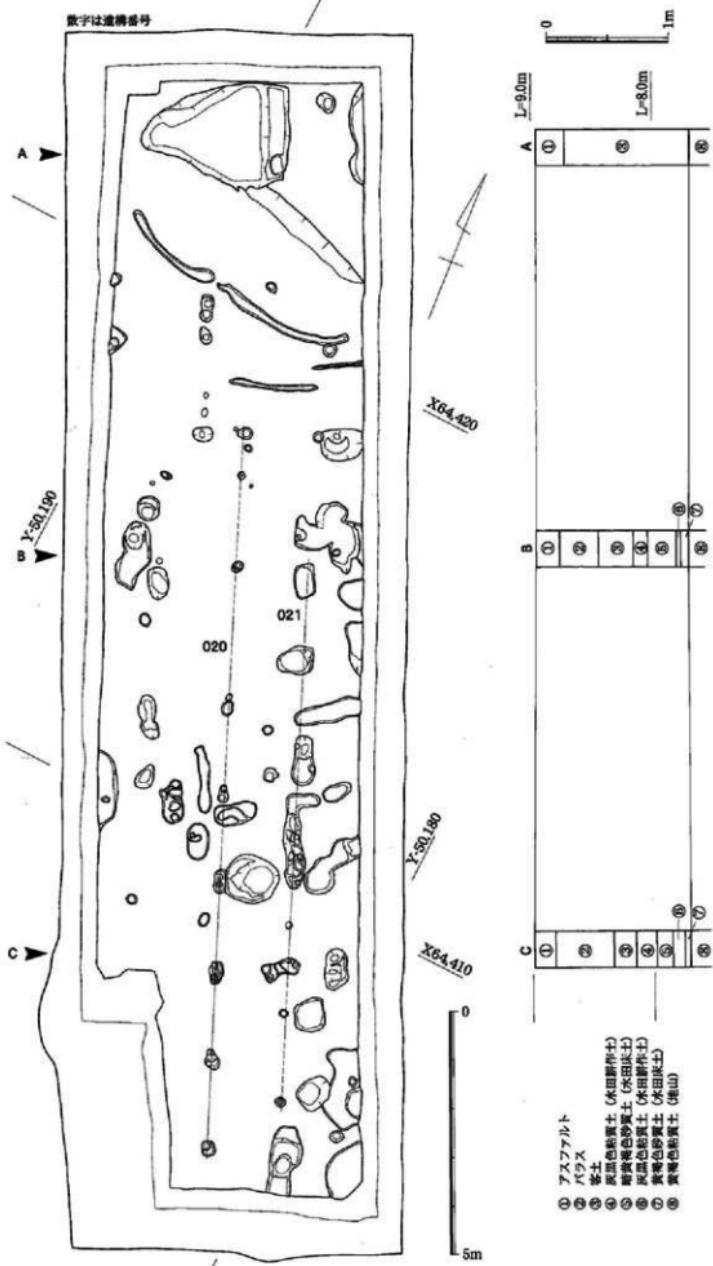


Fig.5 I 区の連携配置 (1/100) と土層略測 (1/40)

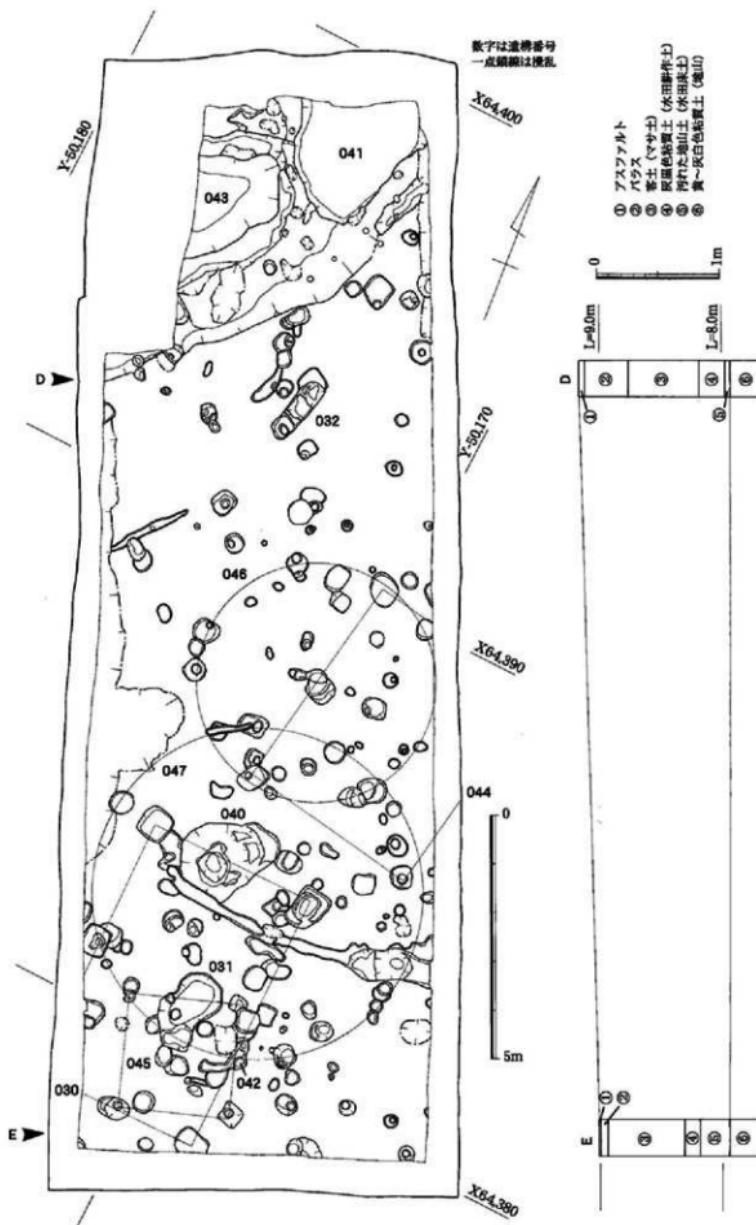


Fig.6 II区の造構配置 (1/100) と土層略測 (1/40)

らの遺構以外は近世～近代の擾乱坑であり、これについては報告を省くが、北端の擾乱坑SK-041から「大正九年」の墨書のある土器が出土し、水田耕作土がこの上面を覆うことから、水田の造営がこれ以降に行われたことを知ることができる。また、擾乱坑SK-043は深部の粘土層に達するまで深く掘られた土坑状のもので、近世の粘土採掘坑と考えられる。

遺物はコンテナにして15箱分が出土した。うち、井戸SE-040から出土した弥生土器が14箱を占めており、他に古代の須恵器や近世陶磁器等が少量ある。

4. 検出遺構と出土遺物

(1) 杭列

SA-020・021 Fig.7, PL.2

北側I区で検出した。杭そのものと、杭の腐食痕とみられる小ピットが2列に並行している。小規模な道を兼ねる水田畦畔の土留め杭列と思われる。主軸方位は磁北から18°西偏し、杭列間の幅は約1.5mで、北側へ若干開いている。杭の間隔は180～190cmで、185cm前後の数値を示すものが大半で、ほぼ1間ごとに打ち込まれたものと考えられる。遺物は全く出土していない。I区は開田による削平により遺構が消滅しており、この杭列は削平後に造営された近世～近代の水田区画に伴うものであると考えられる。

(2) 堀立柱建物

堀立柱建物は3棟を報告する。SB-030は発掘調査時に現場で復元したが、他の2棟は整理時に図上復元したものである。

SB-030 Fig.8, PL.3

II区の南西隅で検出した。南北に長い1間×2間の堀立柱建物とみられるが、南西隅の柱穴ひとつは調査区外にある。SP-104は擾乱坑に一部を切られる。この建物の柱穴は周囲の柱穴を全て切っており、最も後出の遺構と考えられる。他の柱穴に比べ規模が一回り大きく、平面形と配列が整然としているため、容易に堀立柱建物と認識できる。主軸方位は磁北から5°東偏し、真北に近い。桁行全長は5.42mで、柱間は北から2.65m、2.77mを測る。梁行は3.5mである。柱穴平面プランはいずれも隅丸方形を呈し、柱痕跡は認められない。規模は、SP-101が62×52cm、深さ40cm、SP-102は66×64cm、深さ27cm、SP-103は88×67cm、深さ34cm、SP-104は72×50cm、深さ25cm、SP-105は71×55cm、深さ16cmを測る。SP-101は土層断面に柱抜き取り痕を思わせる窪みがあり、底面には深さ5cmの深い窪みがある。SP-103・104は掘り方の一部が段状をなす。柱穴覆土は土層断面図に示すとおりであるが、黒色粘質土を主体とし、地山土である灰白色粘質土や黄色粘質土が粒状に混入している。

SB-030出土遺物 Fig.10

各柱穴から弥生土器が出土したが、大半が小片で図化できるものは少ない。

1は複合口縁壺で、袋状口縁からの過度期的な形を示す。摩滅が著しいが、脣部外面に稜を持つと思われる。調整不明で、淡灰黄色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成良好で外面に黒斑がある。

2は器台の脚部片で、摩滅が著しいが外面ナデ、内面下端に横刷毛目調整痕が残る。外面淡橙色、内面淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で二次加熱を受けている。

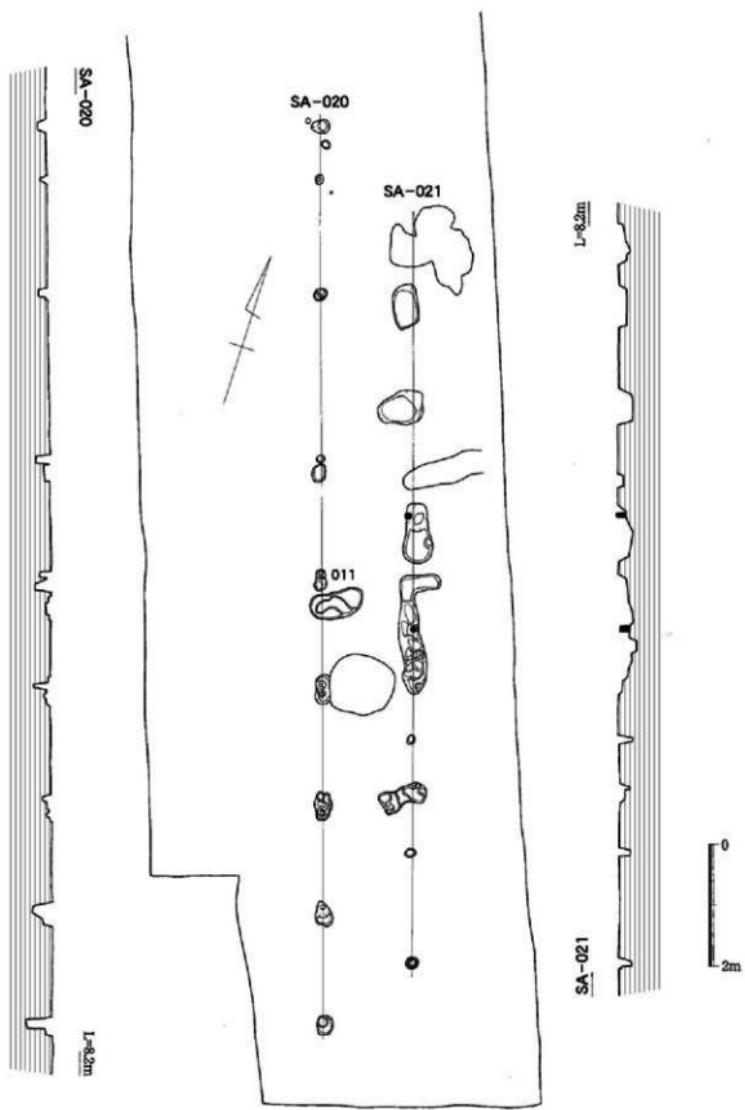


Fig.7 SA-020 • 021 (1/80)

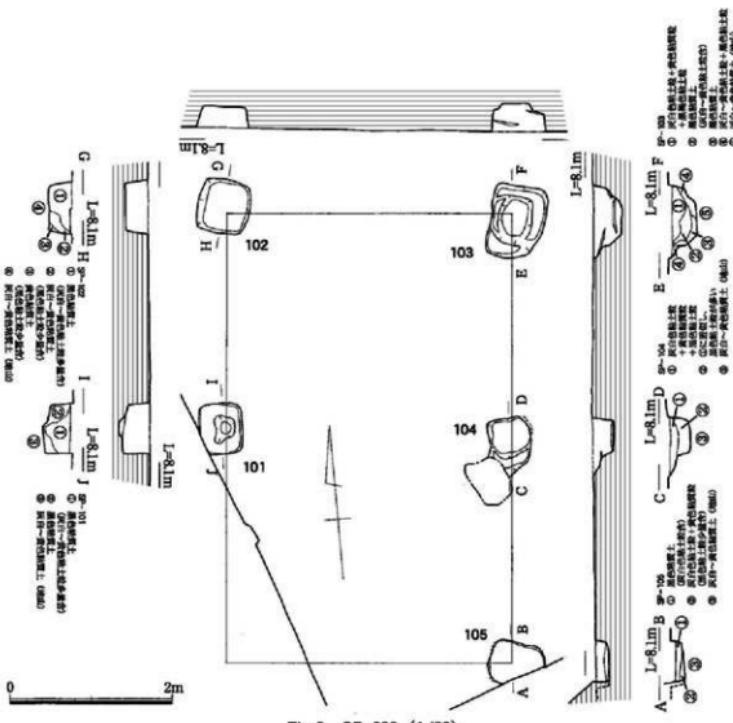


Fig.8 SB-030 (1/60)

1の壇より弥生時代後期前半頃の掘立柱建物と考えられる。井戸SE-040と重複することからそれ以前の建物か、もしくは同時期の可能性もある。

SB-044 Fig.9

整理時に図上復元した掘立柱建物である。II区のSB-030の北側に1.5mの間を置いて位置する。南北に長い1間×2間の掘立柱建物で、北東側は調査区外に伸びると考えられる。西列中央のSP-161は復元竪穴住居SC-046に伴うと思われる土坑と重複するが、切り合い関係はつかめなかった。桁行方位をN-13°-Eにとり、桁行全長4.68mで、柱間は2.34mの等間、梁行は3.8mを測る。柱穴平面形は楕円形を呈し、長径48~74cm、短径43~56cmの範囲にある。深さは18~39cmで、南側のSP-190・192の底面には径15~20cm、深さ10~13cmの小ビットがある。柱穴覆土は黒色粘質土と地山土が混ざったものである。

SB-044出土遺物 Fig.10

各柱穴からは土器のみが出土した。大半が小片で、著しく摩滅している。

3~7は弥生土器である。3は甌の口縁部片で、「く」字形に屈曲し、内面に稜が入る。摩滅のため調整は不明で、暗橙褐色を呈し、胎土に径5mmほどの砂粒少量と、砂粒・雲母粒を多量に含み、焼

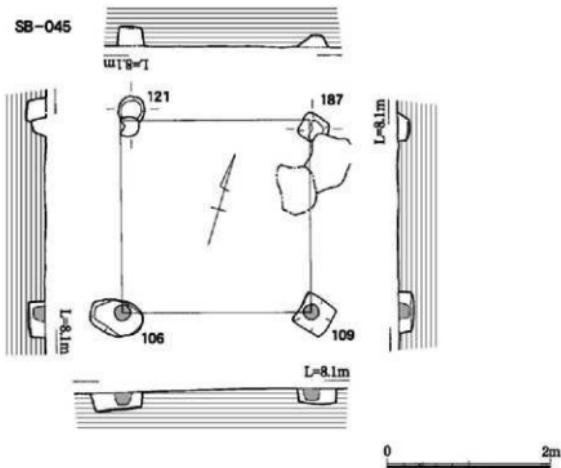
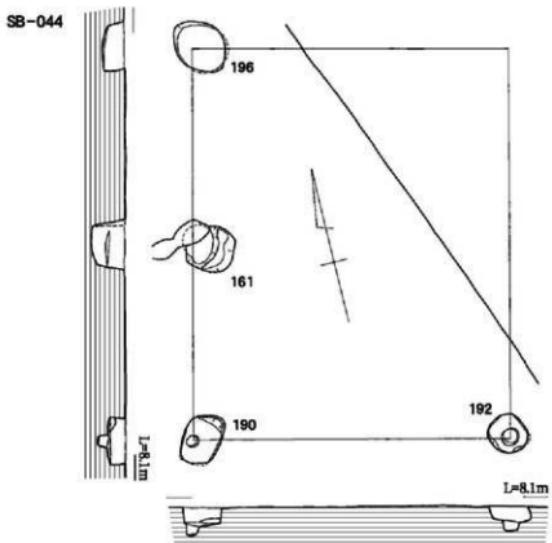


Fig.9 SB-044 • 045 (1/60)

成はやや不良である。復元口径29.0cmだが小片のため不正確。4は小片のため明確ではないが無頸壺であろうか。口縁が短く外反し、外面横ナデ、内面ナデ調整で、淡灰橙色をなし、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好である。5・6は壺の底部で平底である。5は外面の紙刷毛目以外は調整不明で、暗橙褐色をなし、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。復元底径6.3cm。6は調整不明、外面暗橙褐色、内面灰黒色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。7は壺の底部であろう。特に摩滅が著しく調整不明。淡灰橙色を呈し、胎土に大粒の砂粒と砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良で外面に黒斑がある。復元底径8.0cm。

8は古式土師器壺の口縁部小片で、やはり摩滅している。黒褐～灰褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成はやや不良である。

古墳時代前期の遺構と考えられる。

SB-045 Fig.9

整理時に図上で検討し、1間×1間の掘立柱建物に復元した。II区でSB-030と重複する。北東のSP-187はSB-030の柱穴に切られている。主軸方位をN-18°-Wにとり、南北長2.35m、東西長2.3mで、南北に若干長い。柱穴平面形は隅丸方形、円形、楕円形と様々なプランをとり、法量は長径35～54cm、短径32～44cmの範囲にある。深さは15～25cmで、南側のSP-106・109には径19cmの柱痕跡が認められた。柱穴覆土はSB-044と同じである。

SB-045出土遺物 Fig.10

出土遺物は土器のみで、小片が多く、図示できるものは少ない。

9は内面にヘラ削りの痕跡があるため古式土師器の高杯脚として図示したが、摩滅した小片であるため確証はない。端部は面取る。淡橙～淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒が多いが精良で、焼成不良で破面に黒色帯を挟む。10は高杯ないし鉢の口縁部であろうか。内湾し、口縁端部内側に粘土帶を貼付して肥厚させる。摩滅して調整は明らかでなく、暗橙褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成不良で外面に黒斑がある。

他に古式土師器とみられる土器が出土しており、古墳時代前期の遺構であろう。

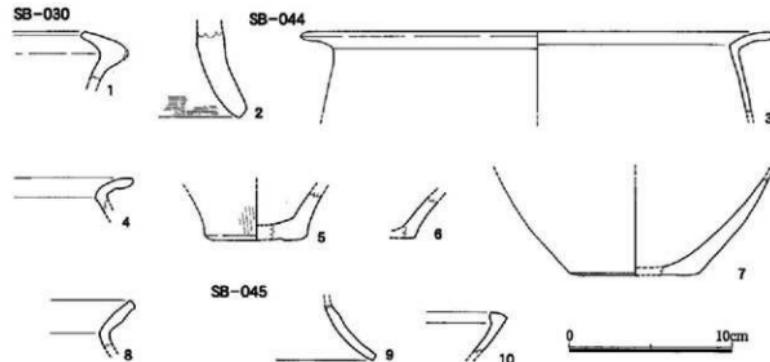


Fig.10 SB-030・044・045出土遺物 (1/3)

(3) 壘穴住居

堅穴住居は2軒を報告する。直列配置を取らない柱穴から円形住居を想定し、造構実測後に図上復元したのである。

SC-046 Fig.11, PL.4

II区の中央に位置し、掘立柱建物SB-044と重複している。掘立柱建物のような直列配置をとらない柱穴から円形竪穴住居を想定して復元した。環状に配置した5~6本の柱穴と、環の中央に位置する小土坑からなる。住居床面の痕跡は全く認められなかった。環の直径は柱穴の心々距離で5mを測る。柱穴の平面形は円～楕円形を呈し、径は最小で25cm、最大で54cm、深さ19~47cmである。SP-150にのみ柱痕跡が認められた。中央の小土坑SP-195は掘立柱建物SB-044の柱穴と重複しており、残りが悪いが現況で径50cmほどの円形プランを呈し、深さ22cmである。柱穴や小土坑の覆土は、黒色粘質土と地山土が混在した土である。

SC-046出土遺物 Fig.12

環状に並ぶ柱穴、及び環中央の小土坑から弥生土器で出土したが、いずれも小片である。

11～21は弥生土器の甕である。11～13は口縁が逆「L」字に屈曲して開く口縁部片で、12・13は口縁内端が若干突出する。いずれも器面が著しく摩滅しており、調整手法は不明である。淡橙色を呈し、胎土には砂粒を多量に含んでいる。13のみ焼成良好で、他はやや不良である。14～17は口縁が「く」字形に屈曲して開き、内面に稜を持つ。いずれも器面が摩滅して調整方法は不明である。14は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成やや不良。15は淡灰黄～淡褐色を呈し、胎土に微砂粒を少量含み、焼成良好。16は淡灰色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好。17は乳白色を呈し、胎土に

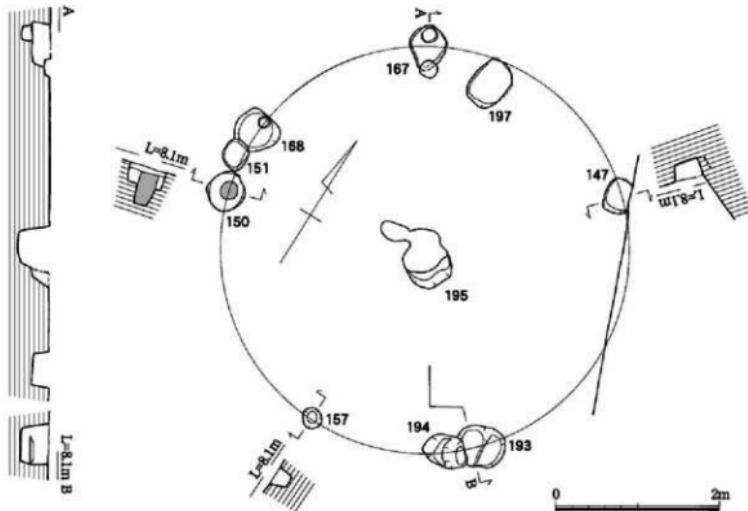


Fig.11 SC-046 (1/60)

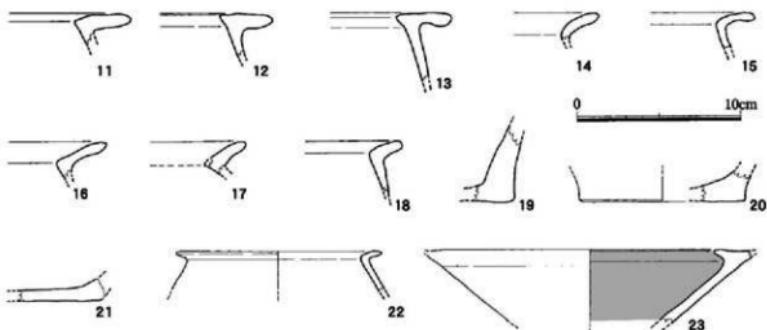


Fig.12 SC-046出土遺物 (1/3)

砂粒を少量含み、焼成はやや不良である。18はやはり口縁が「く」字形に屈曲するが、短く開く。摩滅が著しく調整不明で、淡橙～淡灰黄色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成やや不良である。19～21は甕の底部であろう。いずれも安定の良い平底である。いずれも摩滅して調整手法は不明である。19は橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。20は淡橙～淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成不良。21は橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良である。

22は弥生土器の無頸壺である。摩滅して調整は不明である。淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成良好。復元口径12.6cm。23は弥生土器の高杯の口縁部片で、鋤先形をなす。器面が摩滅しているが、内面には丹塗りの痕跡を留めている。丹は暗赤色、素地は淡橙褐色を呈する。胎土には赤色鉱物と微砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成はやや不良である。

復元案が正しければ、弥生時代後期初頭の円形竪穴住居であろう。

SC-047 Fig.13、PL. 4

II区の南半部に位置する。竪穴住居SC-046、掘立柱建物SB-030・044・045と重なる。SC-046と同様、掘立柱建物として復元できるような直線的な配列をとらない柱穴から円形竪穴住居を想定して復元した。環状に配置した9本ほどの柱穴からなるが、住居床面の痕跡などは全く認められない。また、SC-046と異なり環の中央に小土坑状の遺構はない。環の直径は柱穴間の心々距離で6.76mを測る。柱穴の平面形は円形のものが多く、梢円形のものが少數混じる。径は最小で30cm、最大で56cm、深さは12～42cmである。SP-149にのみ柱痕跡が認められた。柱穴の覆土はSC-046と同様の状況を呈していた。

SC-047出土遺物 Fig.14

環状に並ぶ柱穴から出土した遺物は全て土器片で、図示できるものは少ない。

いずれも弥生土器である。24は甕で、口縁は「く」字形に屈曲して開き、屈曲部内面に稜がある。端部は面取される。著しく摩滅しており調整は不明。橙～褐色を呈し、大粒の砂粒と細砂粒を多量に含み、焼成良好。復元口径20.6cm。25は甕の底部片で、安定の良い平底である。胴部外側に縱刷毛目を留めるが、他は摩滅して調整不明である。淡橙褐色～淡灰黑色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。復元底径8.8cm。26は甕の底部片で、器面は剥落している。胎土に微砂粒を少量含むが精良で、焼成はやや不良である。復元底径6.4cm。

復元案が正しければ、弥生時代後期初頭頃の円形竪穴住居と考えられよう。

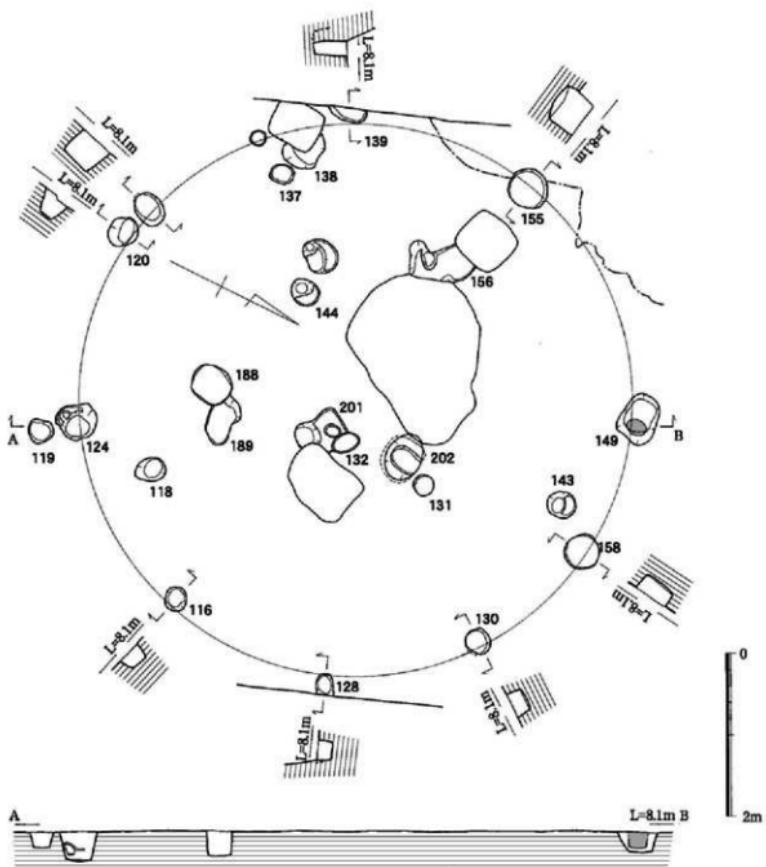


Fig.13 SC-047 (1/60)

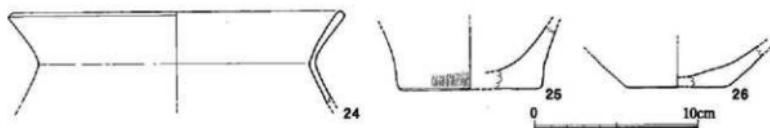


Fig.14 SC-047出土遺物 (1/3)

(4) 井戸

SE-040 Fig.15, PL.5・6

II区の南半部に検出した素掘りの井戸である。掘立柱建物SB-030と重複する位置にあるが、直接の切り合いはない。平面プランは北東に尖る卵形をなし、長径2.1m、短径1.6mを測る。断面は逆円錐形を呈し、検出面から底面まで1.6mを測る。北東壁は他と比べて傾斜が緩やかで、上部は段状に落ちており、底面から0.6mほど上にはテラス状に狭い段が巡り、二ヵ所に窪みを掘り込む。井戸掘削時の足がかりであろう。底面は径25~37cmの小さな不整円形プランをなす。土層断面図の⑥⑦層は①~⑤層に切られており、掘り直した痕跡と考えられる。①層上部から土器を中心に遺物が多量に出土し、井戸がほとんど埋没した段階で一括投棄されたとみられる。図示した土器の大半はここより出土した。

SE-040出土遺物 Fig.16~20, PL.8

コンテナ14箱分が出土した。大半が弥生土器で、他に石器2点がある。

27~47は甕である。27~30は口縁が「く」字形に屈曲して開き、屈曲部内面が丸味を持ち明瞭な稜を持たない。口縁端部は丸くおさめ、口径は胴部最大径を上回るか、ほぼ等しい。いずれも摩滅しており器面の残りが悪いが、調整痕の残るものでは胴部外面が縱方向の刷毛目、内面がナデ調整、口縁部内外面が横ナデ調整である。27は橙褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に、暗赤色鉱物・雲母粒を少量含み、焼成良好。復元口径29.0cm、胴部最大径25.5cm。28は橙褐~淡灰褐色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の暗赤色鉱物を含み、焼成不良。復元口径20.4cm。29は淡褐~淡黄褐色を呈し、胎土に細砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成良好。30は外面黒~暗褐色、内面淡灰色を呈し、胎土に粗砂粒を少量、細砂粒を多量に含み、焼成良好。復元口径27.6cm、胴部最大径27.7cm。

31~36は口縁が「く」字形に屈曲して開き、屈曲部内面に稜を持つ甕である。35・36は口縁端部を面取しており、胴部最大径が口径を上回る。31は胴部の外面は縱刷毛目、内面は摩滅しているが頸部に指押さえ痕が残り、口縁は横ナデ調整。暗橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。復元口径29.8cm。32は胴部外面縱刷毛目、内面は摩滅して調整不明、口縁は横ナデ調整する。外面が黒褐~暗橙褐色、内面が暗橙色を呈し、胎土に細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良。復元口径31.0cm。33は胴部の外面が縱刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデで、口縁上面にヘラによる短沈線を2条入れる。外面淡黄白色、内面黒褐~淡橙色をなし、胎土に細砂粒を含み、焼成良好。小片のため法量不明。34は器面が剥落して調整不明。外面淡褐色、内面淡灰色を呈し、胎土に粗砂粒と細砂粒を多量に含み、焼成不良。復元口径25.6cm。35は接合しないが同一個体とみられる底部があり、小さな平底である。胴部外面縱刷毛目、下間にヘラ削りの後ナデ調整を加え、内面は斜位の刷毛目調整。口縁内外面横ナデ調整。外面黒~褐色、内面淡黒色を呈し、胎土に細砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。復元口径25.8cm、胴部最大径はやや上位にあり29.0cm、器高は33cm程度となろう。36は器面が剥落しており調整不明である。淡橙褐~淡灰褐色を呈し、胎土に粗砂粒と暗赤色鉱物を少量、細砂粒を多量に含み、焼成不良。二次加熱を受けたと思われ、口縁外側が赤変し、胴部は脆く一部が弾けたように剥がれている。復元口径23.0cm、胴部最大径25.9cm。

37は口縁が「く」字形に屈曲して開き、短く伸びる。外面縱刷毛目、内面ナデ調整。外面黒~褐色、内面暗橙色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成不良。二次加熱により外器面が剥落する。小片のため法量不明。38は口縁が短く外反する。口縁部内面に粘土帶を貼り付ける。摩滅が著しいが、外面は刷毛目調整か。内面には指押さえ痕が残る。外面淡橙褐色、内面淡灰色を呈し、胎土に細砂粒を多量、暗赤色鉱物を少量含み、焼成不良。小片のため法量は不明。

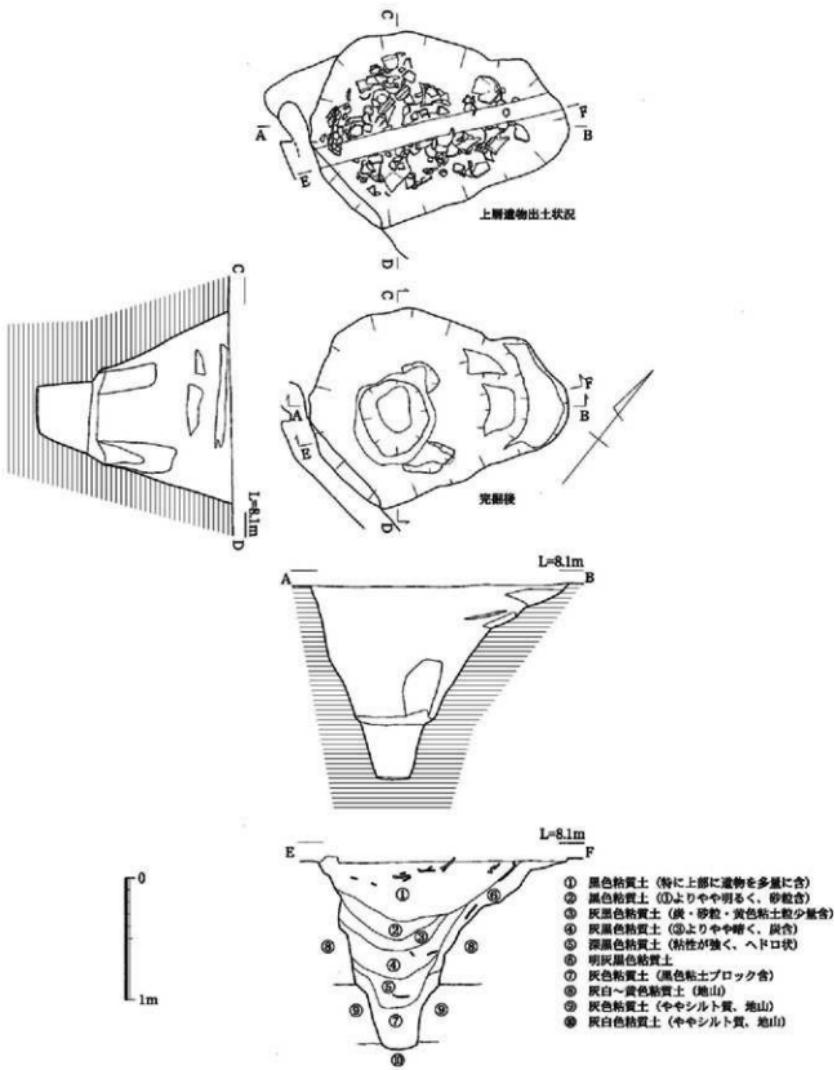


Fig.15 SE-040 (1/40)

39～44は甕の下半部ないし底部片と考えられ、全て安定の良い平底である。39は厚く、外底中央が少し窪む。外面の縦刷毛目以外は調整不明である。橙褐色を呈し、胎土に砂粒を少なく、雲母粒を多く含み、焼成不良。40は外底が剥落しており、他の部位も摩滅しているが、内底に指押さえの痕跡を留める。外面淡橙褐色、内面黒～褐色を呈し、細砂粒を極めて多量に含み、焼成不良。41は器面が剥落し調整は不明。外面暗橙色、内面黒色を呈し、粗砂混じりの砂粒を多量に含み、焼成不良。42も器面が剥落するが、胴部下端に縦刷毛目が僅かに残る。淡褐色を呈し、細砂粒を多量、暗赤色鉱物と雲母粒を少量含み、焼成不良。43は外器面の摩滅が著しく、内面にはコゲ状の炭化物が付着するが底部に指押さえ痕が残り他はナデ調整か。橙～灰色を呈し、細砂粒を多量に含み、焼成不良。44は底部が剥がれ落ち、胴部は外面とも摩滅が著しい。淡橙～淡灰色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。胴部外面下端に黒斑がある。

45～47は一回り小さい甕の下半部と思われる。45は胴部外面が縦刷毛目、外底がナデ、内面の調整痕は不明。外面が褐～淡灰褐色、内面が淡灰褐色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。46は器面の残りがよく、胴部外面縦刷毛目、底部ナデ、内面は指押さえ後に削りを加え、ヘラナデ調整する。外面が淡灰褐色、内面が淡黒色を呈し、胎土に細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成不良で外底に黒斑がある。47は胴部外面縦刷毛目、内面はナデ調整か。外面黒褐色、内面橙色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。

48～54は壺である。48は瀬戸内系の垂下口縁壺で、大型品である。口縁部片と頸部片があるが接合しない。口縁は外反して大きく開き、端部は接合部から剥落するが屈曲して下方に垂れるとみられる。頸部外面には少なくとも7条の凹線文を回すが、器面が摩滅して調整痕は残らない。内面は中位に断面台形の貼付突帯2条を水平に巡らし、口縁端部は内側に肥厚させて円形浮文を2個付ける。内器面は斜位の刷毛目後、ナデ調整で、突帯周辺は横ナデする。淡灰色を呈し、内面に暗赤色の丹塗りの痕跡を留めるが、本来は外面にも丹塗りであろう。胎土には粗砂を含む細砂粒が少なめに入り、焼成良好。49は袋狀口縁壺の小片で、口縁は丸く内湾する。器面が剥落し調整不明。外面淡橙色、内面淡灰色を呈し、胎土に粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。50は複合口縁壺である。口縁は内傾し僅かに内湾する。口縁屈曲部内面に指押さえ痕を留めるが、他の調整は不明である。淡橙～淡黄色を呈し、胎土に粗砂粒・細砂粒を多量に含み、焼成は極めて不良。復元口径18.8cm。51は壺として図示したが小片のため確証はない。口縁端部は内湾して肥厚し、上面に凹線を回す。外面は横ナデ、内器面は摩滅しており、内面以外に丹塗りを施す。いわゆる「双孔広口壺」に類似する。淡黄褐～淡灰色をなし、丹は淡い暗赤色を呈する。細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成不良。52は単口縁の壺で、口縁と胴部の一部を欠くがほぼ完存する。口縁は外反して開き、端部は面取する。屈曲部外面に断面三角形突帯一条を貼付する。胴部球形で最大径は中位にある。底部は丸味のある平底で、安定が悪い。器面が剥落し、調整痕は不明。淡灰褐色を呈し、粗砂混じりの砂粒を多量に含み、焼成良好。胴部下半の外面に黒斑が一ヵ所ある。復元口径14.6cm、胴径24.8cm、器高28.0cm。53は壺の胴部片で、肩の張る球形をなす。外面は縦～斜めの刷毛目、内面はナデ調整で、肩部内面に指押さえ痕がかすかに残る。淡灰色で、胎土は精良、焼成不良で胴部上半に黒斑が一ヵ所ある。内面は炭化物により黒く煤けており、煮炊きに使用した壺か。54は小型壺である。口縁は短く外反し平底である。摩滅しており、内面に指押さえ痕が残るのみ。淡橙褐色を呈し、細砂粒少量、雲母粒を多量に含むが精良で、焼成良好。内面下半に黒色の皮膜が付着しており、分析の結果、漆ではなくマンガンを含む黒色顔料とみられる。

55はやや器高が高いが無頸壺の蓋か。器面が剥落して調整痕は残らない。粗砂粒・細砂粒・暗赤色鉱物・雲母粒を含み、焼成はやや不良。56・57は無頸壺で別個体である。56は口縁に一孔を穿つ。摩

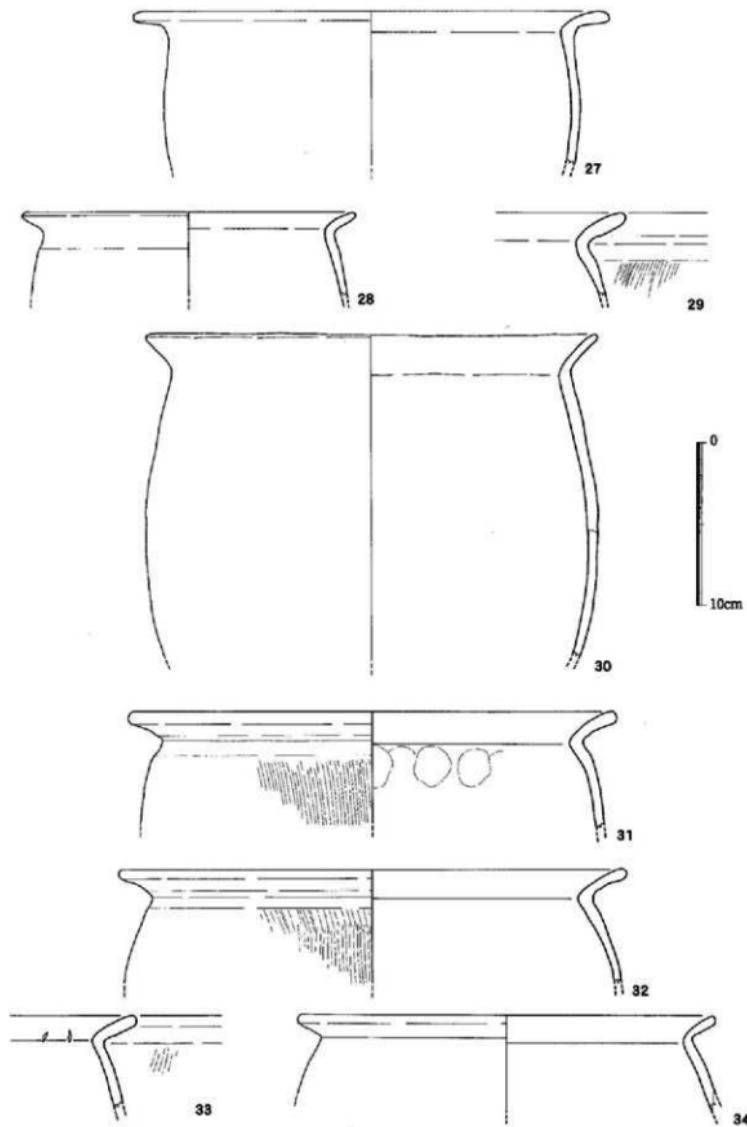


Fig.16 SE-040出土遺物 I (1/3)

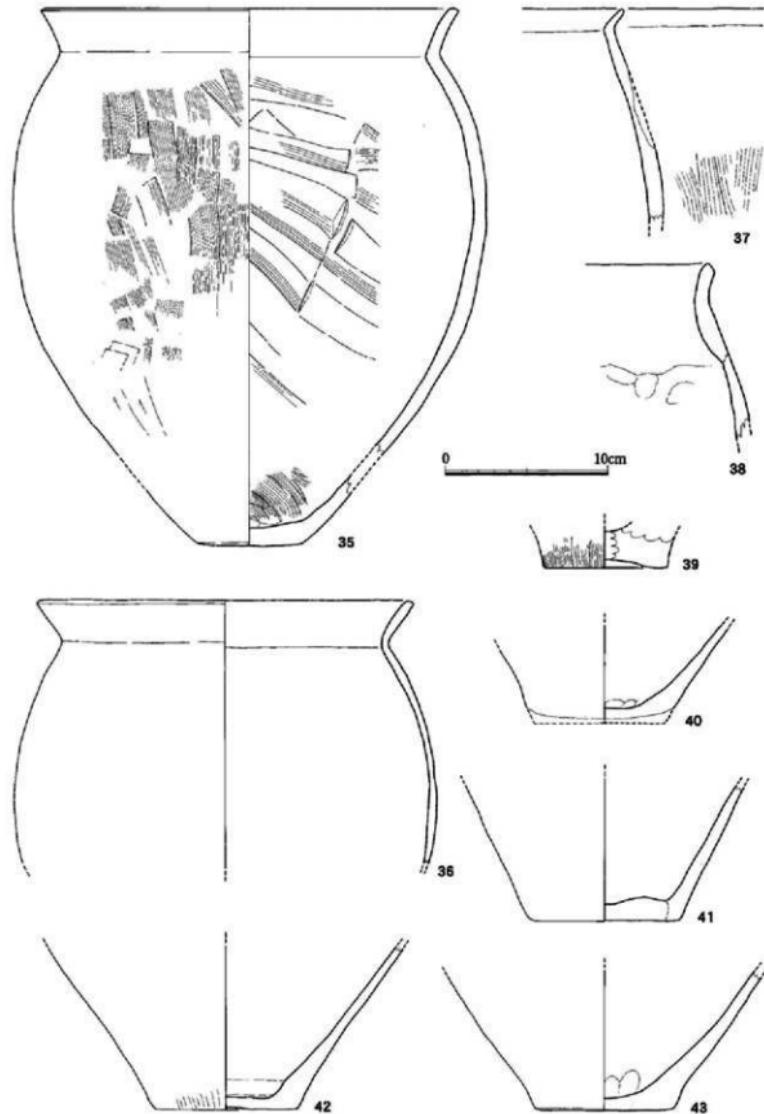


Fig.17 SE-040出土遺物 II (1/3)

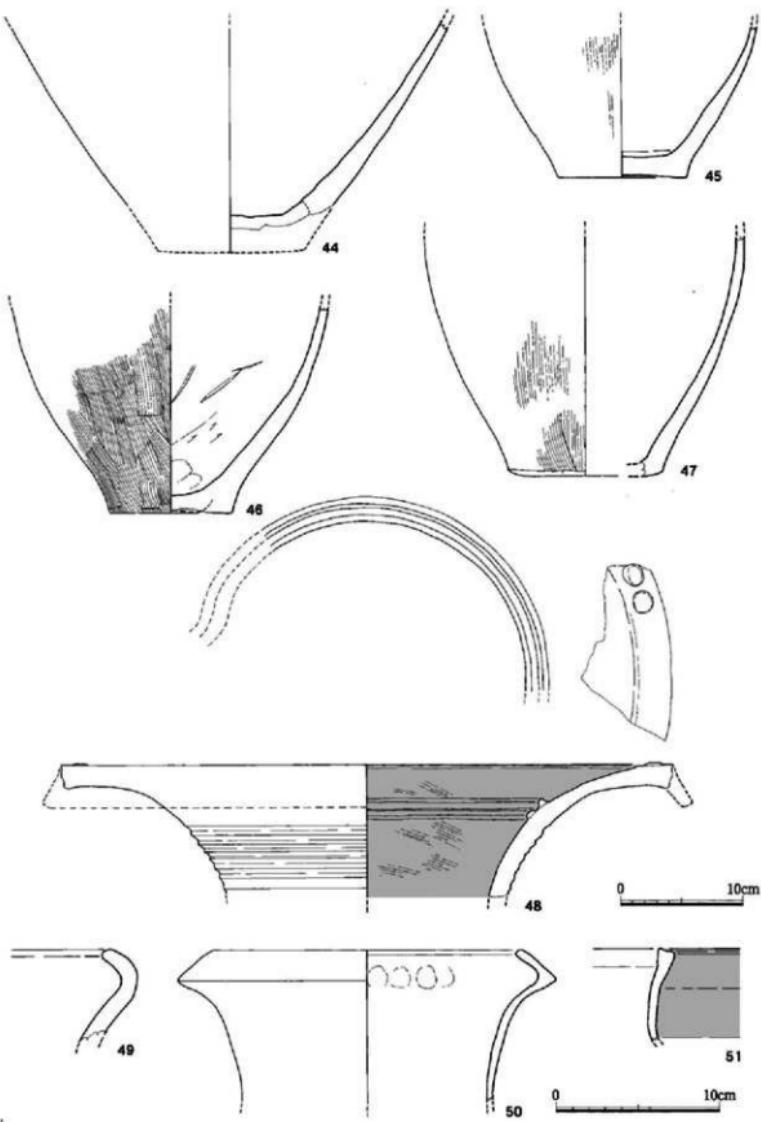


Fig.18 SE-040出土遺物III (48は1/4、他は1/3)

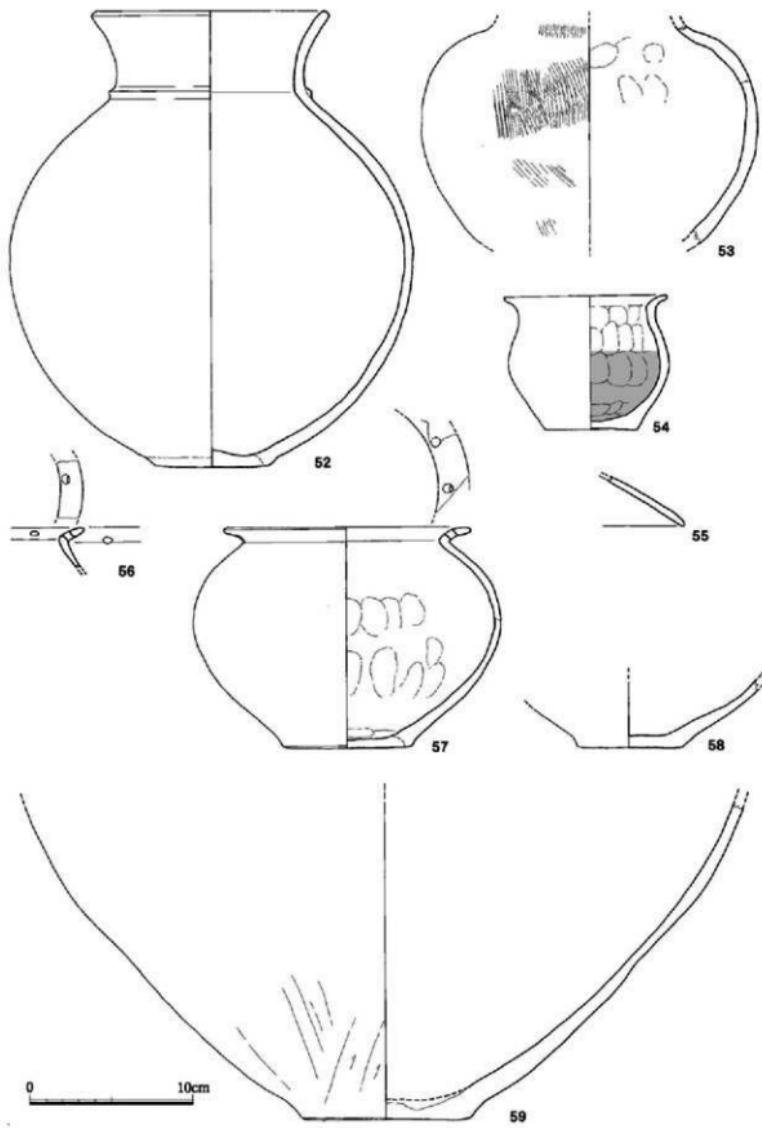


Fig.19 SE-040出土遺物IV (1/3)

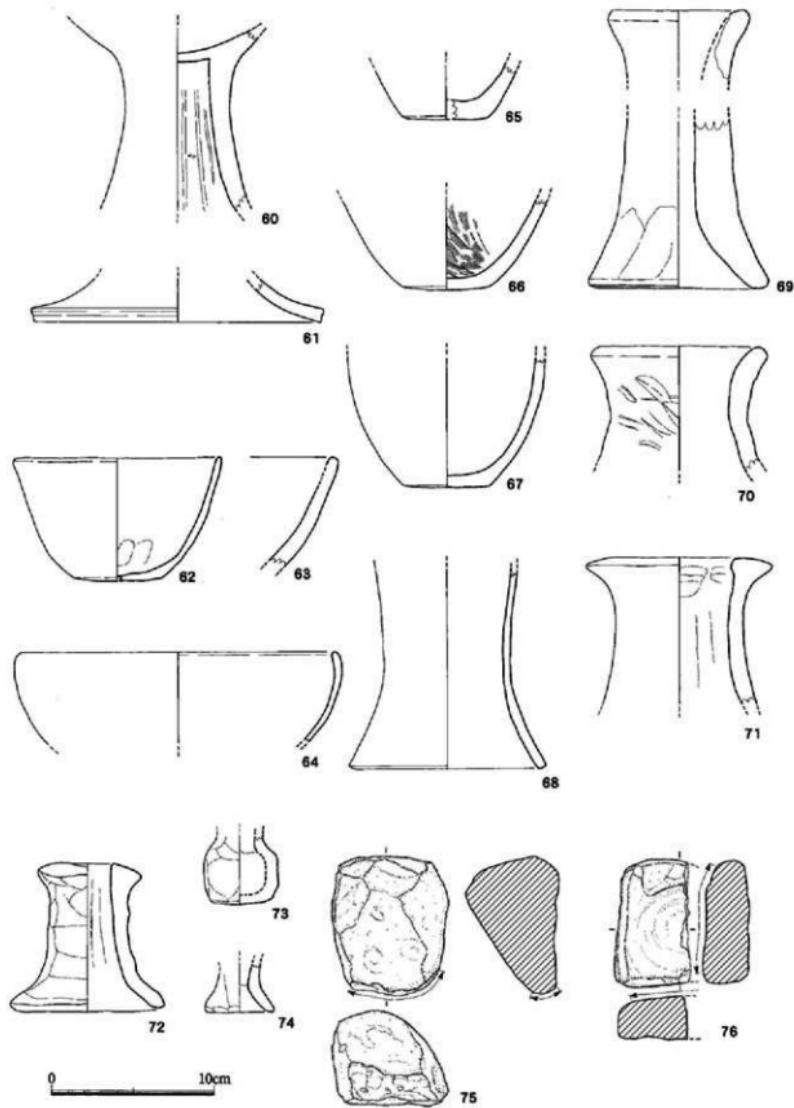


Fig.20 SE-040出土遺物V (1/3)

減して調整不明。淡橙色を呈し、胎土に少量の細砂粒・雲母粒・カクセン石・暗赤色鉱物を含み、焼成不良。57は56よりも口縁が強く外反し、二孔があく。器面は摩滅するが、内面に指押さえ痕が残る。淡橙～淡灰色を呈し、胎土に粗砂混じりの細砂粒を多量に、暗赤色鉱物・雲母粒を少量含み、焼成良好。上半の1/2を欠き、復元口径15.0cm、器高13.6cm。

58・59は壺の底部で、いずれも平底。58は器面が摩滅するが、内面ナデ調整か。淡橙～淡灰褐色を呈し、粗砂粒・細砂粒・雲母粒・カクセン石を含み、焼成不良。59は同一個体とみられるが接合しない他の破片があり、肩部に断面三角形突帯が付くと思われる。外面は刷毛目の後、下部ヘラナデ、上部ナデ調整。内器面は剥落するがナデ調整か。橙～淡灰色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良で内面は黒色を呈する。外面下端に黒斑がある。

60・61は高杯である。60は太めで中空の脚を杯底に貼り付ける。器面は剥落しており、脚内面にヘラ整形痕を残すのみ。暗橙褐色をなし、粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良。61は脚下端部の小片で、器台の可能性もある。端部は面取する。摩滅して調整不明。暗橙褐色～淡灰褐色を呈し、微砂粒を少量、雲母粒を多量に含むが精良で、焼成良好。

62～67は鉢としたが、小型の壺が含まれるかもしれない。62は丸味の強い平底で、体部が内湾して開く。器面は剥落するが、内底部に指押さえ痕を留める。禮服～淡橙色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良で外面下半の一カ所に黒斑がある。口径12.8cm、器高7.6cm。63は内湾して開く口縁部の小片で、摩滅するが内面はナデ調整か。外面淡灰色、内面黒～黒褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成不良。64は口縁が内湾してすぼまる。調整不明。淡黄褐色を呈し、粗砂粒・細砂粒・雲母粒を少量含み、焼成良好で外面上半の一カ所に黒斑がある。復元口径19.2cm。65は底部片で、安定の悪い平底である。器面の残りが悪いが外面ナデ調整か。暗橙褐色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好だが二次加熱を受け脆い。66も不安定な平底で、外面はヘラ状工具によるナデ、内面はナデ→刷毛目調整。外面淡橙色、内面淡黒色で、細砂粒を多量に含み、焼成不良で外面に黒斑がある。67も平底だが安定は悪い。内外器面が剥落するが、外面下端はヘラナデ調整か。灰褐色を呈し、胎土に砂粒が極めて多く、暗赤色鉱物を僅かに含む。焼成不良で、二次加熱を受けており脆い。

68～72は器台なし支脚で、68を除き、いずれも二次的に加熱を受けたとみられ、脆くなっている。68は薄手で、上端部を欠く。器面は完全に一枚剥げ落ちており、調整や色調は不明。胎土に粗砂混じりの砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成は一部が不良。69は厚手で、調整痕は残らない。暗橙色を呈し、胎土に砂粒を極めて多量に含み、焼成良好。70も厚手で、外面は荒くヘラ整形、内面はナデ調整か。赤黒色を呈し、胎土には砂粒が多く、焼成良好。71は上端部が潰れて内外に張り出す。外器面は剥落し、内面は上端部に指押さえ痕、以下はナデ調整。淡黄褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を含み、焼成不良。72は小型で、上端部は外方に張り出す。摩滅が著しいが、指ないしヘラ整形か。淡黄褐色～橙色を呈し、胎土に粗砂粒を少量、細砂粒を多量に含み、焼成良好。器高9.1cm。

73・74は手捏ねの土器である。73は小壺の形状をなし、口縁を欠く。指整形だが器面は荒れている。黒～褐色を呈し、胎土に砂粒が多く、焼成不良。74は器台を模したか。器面が剥落して黒色を呈するが、本来の器表面は淡黄褐色である。胎土には砂粒・カクセン石を多量に含み、焼成不良。

75・76は石器である。75は磁石で、一面のみに使用痕があり、やや産む。風化が著しい。76は敲打具で、下端部に使用痕がある。拳大で、花崗岩製。

図示した袋状口縁壺や無頸壺の他、逆「L」字形口縁の壺などがあり、弥生時代中期までの土器を多く含むが、埋没して窪みと化していた井戸跡に後期中頃（古）に一括廃棄したとみられる。従って井戸は後期前半頃の造構と考えられよう。

(5) 土坑

土坑は3基を報告する。弥生時代後期前半頃の遺構と考えられる。他の土坑は全て近代以降に下る擾乱坑である。

SK-031 Fig.21

II区南端部で検出した。掘立柱建物SB-030・045と重複するが、これらの柱穴と直接の切り合いはない。南北に長いいびつな楕円形プランを呈し、長径1.75m、短径0.8m、深さ7cmで、断面は浅い皿状を呈する。覆土は黒色粘質土である。

SK-031出土遺物 Fig.22, PL.8

図示した弥生土器の他、土器片が7点出土した。

77は小型の鉢である。口縁が外反して開き、胴中位に稜が入る。底部は平底である。器面が摩滅しており調整不明。暗橙～暗褐色を呈し、微砂粒を多量に含み、焼成不良。復元口径7.2cm、器高5.0cm。

78は壺の底部である。器面が著しく剥落する。外面淡灰色、内面淡橙色、砂粒を多量に含み、焼成不良である。

SK-032 Fig.21, PL.6

II区の北半部で検出した。南北に長い楕円形プランをなすが、複数の柱穴が切り合っている可能性が強い。長径1.4m、短径0.45mで、南北両端にピット状の瘤みがある。深さは、最も深い部分で15cm、最も深い北端部で38cmである。覆土は黒色粘質土と灰白色粘質土（地山土）の混合土である。

SK-032出土遺物 Fig.22

図示した遺物の他に、土器片25点が出土した。

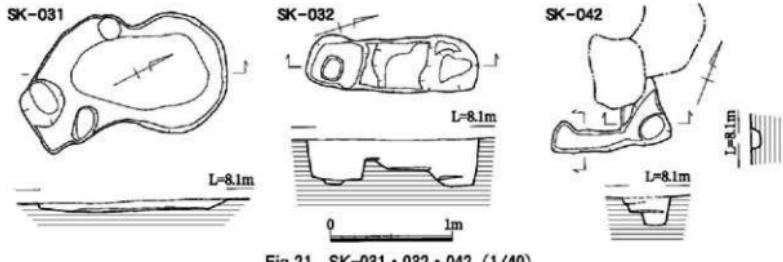


Fig.21 SK-031・032・042 (1/40)

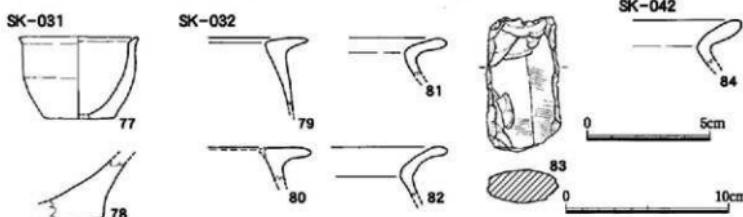


Fig.22 SK-031・032・042出土遺物 (83は1/2、他は1/3)

全て甕の口縁部小片である。79は逆「L」字形をなす口縁部で、器面は摩滅する。淡灰～橙褐色を呈し、胎土に赤色鉱物と砂粒を含み、焼成やや不良。80も逆「L」字形をなす口縁部で、内端が若干突出する。調整痕は残らない。橙～淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多量、雲母粒を少量含み、焼成良好。81は「く」字形に屈曲する口縁部で、内面に稜はない。摩滅して調整不明。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良。82は「く」字形に屈曲して開き、内面に稜を持つ。器面は摩滅しており、褐～橙色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成良好。

83は磨製石剣であろう。表裏平坦面に横位の擦痕があり、鎌を研ぎ出している。上下は折れており、周縁を打ち欠いて二次利用したものとみられる。石材は粘板岩か。

SK-042 Fig.21, PL.7

II区の南端付近で検出した。掘立柱建物SB-030の柱穴と攪乱坑に切られる。L字形に屈曲する平面プランを呈することから、方形堅穴住居が削平されてコーナー部分の壁溝のみが残った可能性も考えられる。現況で東西1m弱、南北0.6mの長さを測り、深さ10cm弱。屈曲部に径25cm、深さ10cm強の小ピットがある。覆土は黒色粘質土と灰白色粘質土（地山土）が混ざった土である。

SK-042出土遺物 Fig.22

図示した土器以外に、土器片11点が出土した。

84は弥生土器甕の口縁部で、「く」字形に屈曲するが内面の稜は曖昧である。器面が荒れて調整不明。橙～淡橙色を呈し、砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成やや不良である。

第三章 おわりに

道路を隔てた北側の第6次調査と今回の調査状況、及び周辺地形からみて、東側の丘陵から伸びてくる高まりがI区付近にかかっていたものと推定されるが、近世・近代にこれを大きく切り崩して水田開発を行ったようで、遺構の残りが悪く、特にI区では遺構が皆無であった。II区は南側の谷部に向かって基盤土が下っており、強く削平を受けているが深い遺構が残っていた。検出した遺構は、弥生時代後期初頭の円形堅穴住居とみられる柱穴群2、後期前半の掘立柱建物1・土坑3・井戸1、古墳時代前期と考えられる掘立柱建物2である。弥生時代中期の土器も少量出土したが、中期に位置付けられる遺構はない。第6次調査では中期の円形堅穴住居を確認し、中期末～古墳初頭の埋没谷を隔てて更に北側に位置する久保園遺跡第3次調査でも円形住居を始めとする中期後半の遺構を多数検出したが、ここでは後期前半の遺構がなく、中断を経て後期後半から古墳時代前期に再び集落が出現している。限られた範囲の調査からではあるが、弥生時代には時期によって集落が立地を変えており、古墳時代前期には一帯に広く集落が展開した状況が想定できよう。井戸SE-040から出土した回線文の大型甕（Fig.18-48）は、周防地域特有といわれる弥生時代中期の垂下口縁甕に特徴が類似し、丹塗りが施される。一部後期中頃（古）まで下る在来土器とともに一括投棄されているが、袋状口縁甕や無頸甕など中期までの土器が多数含まれており、これらと同時期と考えられる。第4次調査でも口縁端部が垂下する甕が1点出土しており、席田大谷遺跡群では類品が稀に見られるようである。宝満尾遺跡の船載鏡、久保園遺跡第1次の大型掘立柱建物、赤穂ノ浦遺跡の横帶文銅鐸鋳型、席田大谷遺跡群第4次と久保園遺跡第3次の鐸型土製品など、特色ある遺構・遺物を有する弥生時代中・後期の席田遺跡群に、西部瀬戸内地方との交流という新たなキーワードを加えたと言えよう。

PLATES

(図 版)



I 区から福岡空港を望む（南から） 未供用道路部分が久保園遺跡第3次及び鷲田大谷遺跡群第6次調査地点



1. I区の表土剥ぎ（北から）



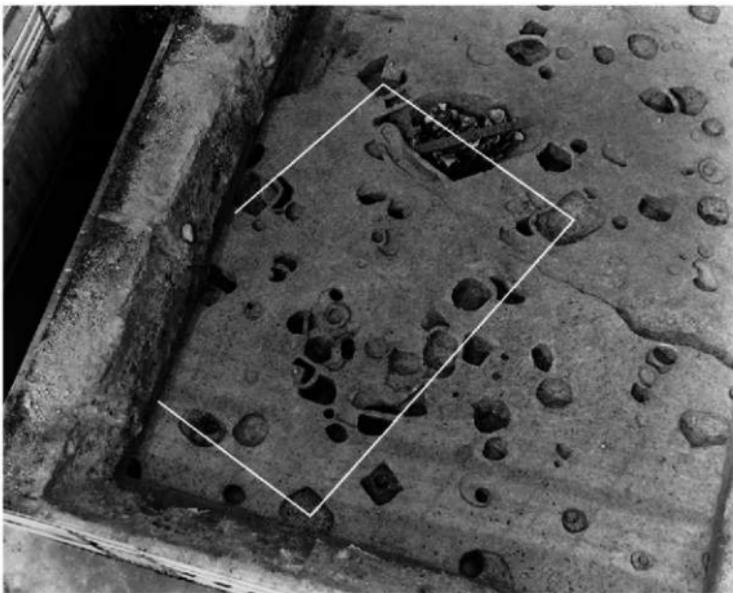
2. 調査範囲の全景（南から） 手前がII区、I区は奥の堆土置場～産地



1. I区全景（南から）



2. II区全景（南から）



1. SB-030 (南から)

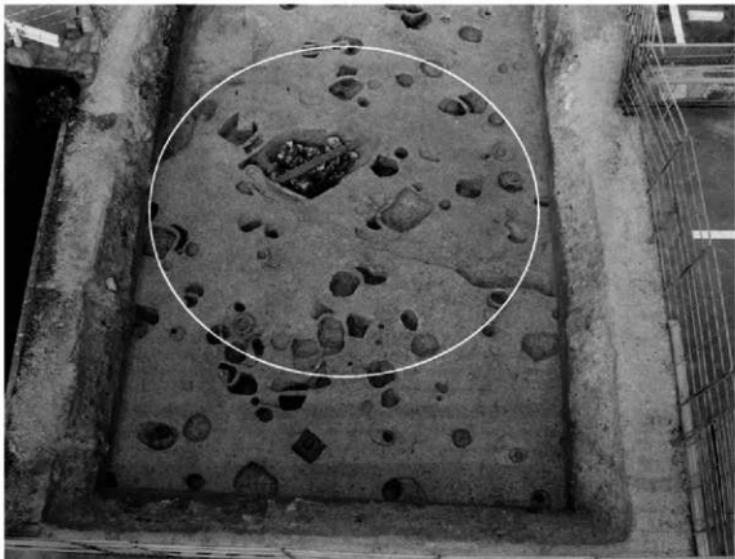


2. SB-030 (北西から)

PL. 4



1. SC-046 (南から)



2. SC-047 (南から)



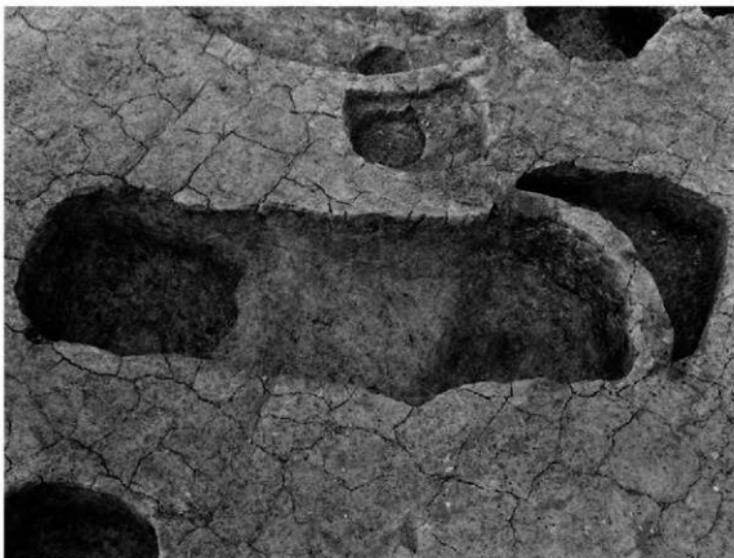
1. SE-040上層遺物出土状況（北西から）



2. SE-040土層断面（南東から）



1. SE-040完掘後（南東から）



2. SK-032（東から）



1. SK-042 (東から)



2. II区調査風景 (北から)



出土遺物（縮尺不同）

番号はFig.に一致する

報告書抄録

ふりがな	むしろだおおたにいせきぐん ろく						
書名	席田大谷遺跡群 6						
副書名	空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	5						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第907集						
編著者名	吉武 学						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667						
発行年月日	2006年3月31日						
所収遺跡名	所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
席田大谷遺跡群 第7次	福岡市博多区 東平尾3丁目 1番地内	市町村 40130	遺跡番号 0024	33°34'58" (世界測地系)	130°27'25" (世界測地系) 20041005 ~ 20041119	363	都市計画道路 福岡空港線改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
席田大谷遺跡群 第7次	集落	弥生時代後期	円形壙穴住居? 2 +掘立柱建物 1 + 土坑 3 +井戸 1	弥生土器+石器	弥生時代後期を中心とする集落、瀬戸内系弥生土器		
		古墳時代前期	掘立柱建物 2	古式土師器			
		近世	杭列 2	肥前系染付			

席田大谷遺跡群 6

—空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 5 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第907集

2006年(平成18年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 日の出印刷株式会社

福岡市東区香住ヶ丘6丁目7-23